

# 貧困の継承

坂井 美穂

## はじめに

1996年に住民移転が完了し、25年余が経過した、コトパンジャン・ダム建設によって移転を余儀なくされた村々。当時大学でインドネシア語を専攻していた筆者は、2003年以降、幾度となく現地に足を運び、人々の生活を見、話に耳を傾けてきた。日本のODAによるこのダム開発がもたらした影響については、これまで様々なアクター（事業関係者、研究者、NGOsなど）によって肯定的にも否定的にも議論がなされてきたことは承知している。しかし筆者は、研究者や大学関係者といった肩書きではなく、ただ純粹に、現地の人々と暮らしを共にし、一時的でも苦楽を共にすることで、彼らの社会の断片だけでも何とかして感じ取りたいといった、共感型のただの pemerhati（インドネシア語で観察者、オブザーバーの意）として、人々に関わってきたつもりである。今回は、そんな筆者の四方山話に少しばかりお付き合いいただければ、と思いつづけている。

それは、いつものように現地の村に滞在していた際の、ふとした気づきだったように思う。西スマトラ州とリアウ州をつなぐ主要な国道沿いにあるその村では、国道に沿って採石が毎日のように行われており、それが日常の風景の一部であった。採石や薪拾い、農漁業や商売の手伝いといった、インフォーマルセクターと呼ばれる形式の生業が、よく見るとそこかしこに溢れている。「あの人たちはまだ若く見えるね」と、いつも現地滞在のサポート役を務めてくれるI氏に尋ねると、「主に pecahan KK (kepala keluarga) だから」と彼は教えてくれた。その時初めて意識するようになったその言葉は、インドネシア語で KK は Kepala Keluarga、世帯（主）、pecahan とは分離した者の意である。すなわち、移転してきた世帯から新村にて独立し、新世帯となった世帯のことだ。



国道沿いで行われる採石作業（タンジュン・パウ村、2013年）

新しく所帯を持った人たちが総じて若い、そのため生活が困迫しているというのは理解できる。また、一般論として、農村から都市部などに移住した人々がインフォーマルセクターで日々の稼ぎを得て暮らすことも理解できる。しかし、筆者が目にしていく、この赤道直下の炎天下の中、国道沿いで汗や埃にまみれて採石する、浅黒い肌の彼らは、幼い頃（もしくはまだ生まれていなかったかもしれない）に、親兄弟とかつて移転してきた者である。新村に移転した世帯には、わずかばかりのゴム園や畑地が用意されていたのではなかったか。こういった背景があり、どのような思いで彼らは不安定な職に従事し暮らしているのか。筆者が pecahan KK と呼ばれる人々への関心を深めることになったのは、こうした何気ない気づきがきっかけであった。

## 文化的背景と社会保障としてのコモンスの消失

さて、ここで取り上げている村々は、ダム建設によって沈められたかつての河川と共に暮らした人びとの村であり、その人びとの文化は、とてもユニークなものであったことは間違いない。とい

うのも、どこからいつ頃やって来て定住したか、その起源ははっきりしていない（口承文化のため、書かれた記録がない）が、彼らの祖先は代々、ミナンカバウ（Minangkabau）の文化をもつ人びとであったからだ。ミナンカバウというのはエスニックグループの一つであり、また文化圏の一つでもある。一般的には、世界有数の母系制によるコミュニティと、インドネシア国内でも有数の、イスラームが浸透する社会として知られている。ハッタ初代副大統領をはじめ、著名な政治家や知識人なども多く輩出している。現代インドネシアにおいて、ミナンカバウ人は、スマトラ島中部の西スマトラ州を中心に隣州であるリアウ州やその他様々な地域・国に暮らしている。



ルマ・ガダンを模した博物館（西スマトラ州ブキティンギ市、2012年）

ミナンカバウはその名の通り、その象徴であるカバウ（インドネシア語では kerbau、水牛の意）があちこちで見られる。水牛は貴重な労働力（田畑を耕すなど）であり、食糧であり、財産であった。現代では維持管理が大変な伝統的なつくりの家屋はルマ・ガダン（大きな家、の意）と呼ばれ、その目印は、水牛の角を象った特徴的な屋根にある。母方の家族や親族が共に暮らし、時には親族会議なども開かれた。ミナンカバウでは、原則として財産を継承するのは長子の女性であり（母系制）、一族を守るため母方のおじ（マ

マック）が、慣習（アダット）に則り財産を維持、管理、運営（利用）する。ある女性に子どもが生まれると、その子らは女性が所属する血縁集団に属する一方、その女性と婚姻関係を結んでも、夫は夫自身の母方の血縁の所属のままである。ムラユ、ピリアン、ピトパン、ドモなど固有の名称を持つスク（氏族、西スマトラには100のスクがあるとも言われる）と呼ばれる母方の血縁集団を率いるのは、ママックらの中でも優れたリーダーであるプンフル（氏族長）の役目である。一般的に、一つの村（ナガリ）はいくつかのスクで構成されている。

ミナンカバウという文化、社会を考えるにあたって、その最たるものは土地に関するものである。それは、土地所有・相続のあり方が、ミナンカバウ母系制の根幹を成しているからである。土地に対する高い位置付けは、彼らの共同体のあり方と慣習、そして価値観によって支えられており、主に農業などの一次産業が盛んな地域において、土地（どこの土地でどのように暮らしているかということ）は、彼ら血縁集団のアイデンティティそのものとも言える。

ミナンカバウにおいても同様であるが、インドネシア国内のエスニックグループの一部にまだ見られるのは、財産の所有・相続において、近代法に基づく私的所有が前提と



隣村バトゥ・ブルスラット村のプンフルの正装をした故ラサド氏（2006年）

されていないことである。それぞれ独自の慣習に基づき、指導者の監督のもと、財産の管理を行ってきた歴史がある。また、現代では大規模な煙害のスケープゴートとして問題視される焼畑も、慣習に基づく伝統的な土地所有・管理サイクルがいまだ行われているケースもある。プランテーションなどの開発のため、無分別に木を伐採し森を焼く用地整備とは区別して見る必要がある。

ミナンカバウでは、タナ・ウラヤットと呼ばれる共有地が存在する。いわゆるローカル・コモンのローカルをさらに限定した、血縁集団やナガリといった母系に基づく共同体により維持管理される入会地である。すべての所属する構成員がこれを利用でき、生活の源とすることができる。特に、経済基盤が脆弱な世帯にとっては生活を保障するための伝統的なセーフティネットである。プンフルらによって監督が行われ、環境に配慮した伝統的な焼畑移動式耕作（耕作をした後、地力保持のため数年休閑し、別の土地を開墾し耕作するのサイクルを繰り返す）が展開されていた。こういった耕作サイクルを可能とする地力と広さがタナ・ウラヤットにはあり、共同体の財産として代々受け継がれてきた大切な土地であった。



旧村に広がるミカン畑の前で（タンジュン・パウ村、1990年頃）

個人による獲得財産と見なされるものもある。売買などで個人的に取得したものや、共有地の一部を、ゴムなど多年生作物の耕作のために長期的に占取すると、開墾し耕作した人物の獲得財産（この場合、労働をおこなった男性の財産となることが多い）となる。これらの個人による獲得財産は、自身が指定した人物に相続させることができるが、相続人がいなかったり、相続が何世代か経過した場合は、血縁集団の財産へ組み込まれることがある。現代のミナンカバウにおいては、共同体の財産と、個人の獲得財産が複雑に混在する状況である。そういった中で、最も憂慮されるべきは、かつて広大な入会地だった土地が個人の財産として、外部の人間や企業へ売られてしまうことである。共同体の財産を売買の対象とすることをかたく禁じていた慣習も、それを代々守ってきた指導者や構成員の絆も、血縁集団のアイデンティティも、ミナンカバウとしての何もかもが、揺らぐ事態ではなかるうか。

コトパンジャン・ダム建設によって移転を余儀なくされた村々では、代々受け継がれたタナ・ウラヤット（入会地そ

のものとその維持管理）は消滅してしまった。ミナンカバウの共同体と個人の財産が混在する状況で、それらへの理解や検討も十分になされることなく、国家事業のため土地収用が行われたらどうなるか、その混乱は想像に難くない。共有地の一部を獲得財産として補償を受け取った人も当然いるだろう。筆者はそれを責めるつもりはない。ただ、土地収用がなかったとしたら、ひいては移転事業が行なわれなかったとしたら、何事もなく共有地の恩恵を受けるはずであった人びとが、社会のセーフティネットも何もない状況に置かれていることは見過ごすことができない。

そして、ミナンカバウでは、ママックにより先祖代々語り継いできた、共同体の歴史や遺産、生活の規範や次世代へのメッセージを伝えるための民話や伝承が存在する。河川と共に暮らしてき

た人びとにとって、河川は生活や文化の一部であり、彼らの民話や伝承を通じて、村の成り立ちや川との暮らしなどが伝えられてきた。また、新生児の沐浴儀式や、断食月（ラマダーン）に入る直前に行く、身を清めるための沐浴（マンディ・バリマウ）といった宗教・伝統行事も、河川で行われていたことに、地域独自の価値観と意義があった。さらに娯楽のためだけでなく、競争心、勝利した他者を尊重する心、敗北を受け入れる心高め、相互扶助（ゴトン・ロヨン）する小舟レースも河川で伝統的に行われていた。こういった祭礼が人びとの絆をより深めていたのだろう。郷土の民話や伝承も、歴史さえも、語られなくなれば守り継がれず消えてしまう。コロナ禍を経験した我々は、様々な祭礼や行事が（開催され）なくなることの辛さを知っている。ダム湖へと変わり、河川がなくなるということは、残念ながら、川と共に郷土やその絆が忘れられていくということなのだろう。



河川と共にあった暮らし（タンジュン・パウ村、1990年頃）

## Pecahan KKの状況、聞き取り結果より

これまで筆者が行ってきたpecahan KKへの聞き取り結果から、彼らの暮らしぶりや課題を再度整理して振り返ってみたい。若干時期はずれるものの、2013年3月及び8月に西スマトラ州のタンジュン・パウ村、2016年3月にリアウ州のムアラ・タクス村にて聞き取りを実施した。この活動にあたり、大阪大学未来共生フィールドワーク基金や皆様方のサポート無しに行うことはできず、この場を借りてご協力いただいた方に、改めて深く感謝申し上げたい。



屋外で仕事の手を止めてもらって話を聞くことも  
（タンジュン・パウ村、2013年）

さて、お堅い専門的なフィールドワークをイメージされるかもしれないが、筆者が行ったのはあくまでも無作為の個別訪問による聞き取りとお話（つまりは雑談、こちらの方が長いこともある）伺いである。聞くべき項目は事前にリストアップしておき、基本的にはそれに沿って話を進めていくことになるのだが（この手法を半構造的インタビューという）、最初からインタビューです、とインフォーマント（情報提供者）にお願いすると、中には身構えてしまう人も出てくるし、聞き手が堅苦しい標準インドネシア語で質問

文を読み上げれば、相手は表面的に「はい、いいえ」程度しか答えなくなる。筆者にとって、これがフィールドでの聞き取りの醍醐味だと思うのだが、表面的な答えから、いかに興味深い話、昔語りを引き出せるかということに尽きる。屋外で仕事の方を呼びとめ石に腰掛けて話を聞いて

たこともある。屋内でお茶を頂くこともある。雨が降らず飲料水に困る時期に、わざわざ遠方から突然雑談をしにきた筆者に差し出してくれた貴重なお茶もあった。そういう時は、素直に感謝の意を相手に伝え、水が大変な時期、あなたはどうしているのか、というように話題を展開していくのである。また時にはワイワイ、何世帯かで集まって雑談を交えながら話を聞き、記録する。大変な作業ではあるが、その人その人がどういう背景でどういう声をあげるのか、直接触れることのできる貴重な機会であった。

なお、聞き取りの対象は、pecahan KKと呼ばれる人びとの中でも、事業により移転した親（または義親）世代を第1世代とし、その子（または義子）らであり新村で新しく世帯として独立したpecahan KK（すでに村を転出した世帯は除く）を対象とし、ここでは便宜上、第2世代と呼ぶ。聞き取り項目は、1)家族構成、2)学歴（ムアラ・タクス村のみ）、3)職業（旧村での親の職業（ムアラ・タクス村のみ）、現在の自身や世帯の生計）、4)家庭経済（収入と支出、借金やローンなどの有無、貯金の有無など）、5)持ち家の有無、6)土地（農地）所有の有無、7)生活環境（行政からの援助含む）、8)最も大変だと感じること及び今後への希望（タンジュン・パウ村のみ）、をあげた。

2013年3月及び8月に聞き取りを行ったタンジュン・パウ村は、1993年に移転が完了した。当時の世帯数は350世帯で、2010年時点の村役場のデータでは506世帯（村を出ることを選択した世帯も加えると600世帯を越えるという村民の話もある）、2010年国勢調査の統計によれば、人口は1817名。同村へのアクセスは、西スマトラ州の州都パダンから200km（道中は険しい山道もあり、6～7時間程度かかる）、同州高原都市ブキティンギと隣州リアウ州の州都プカンバルを結ぶ国道沿いで、リアウ州との境界に位置する。北及び東でリアウ州と、南及び西でタンジュン・バリット村と接する。村には幼稚園、公立小学校、公立高校がある。

同村で話を聞いた第2世代の世帯数は120世帯（有効世帯数119世帯）。以下データ集計の結果と若干の考察である。

1)家族構成について。インフォーマントは、20代、30代が7割超を占め、残りは40代、そして若干数の50代。村出身者同士の婚姻は2割で、ミナンカバウ同士の婚姻が7割、残りは他のエスニックグループ（ジャワ人など）との婚姻とシングル（離婚）の家庭。子どもの数は、0～2人の世帯が7割を超える。



聞き取りに応じてくれた若い夫婦（タンジュン・パウ村、2013年）

3)職業について、できる仕事はなんでもやると返答する者も多く、夫婦共働きもしくは兼業が7割を超えていた。

（親や親族の）ゴム園で働く農業労働者として、また、採石、薪採取、運転手、小規模サービス業（雑貨店や食事処の経営）などが挙げられた。しかし、定期的な収入が保障されているわけではなく、天候、市場価格の変動、交通事情、仲買人の訪問頻度に至るまで、彼らの収入を左右す

る要因が多く不安定である。なお昔のタンジュン・パウ村は、川と国道沿いに住宅や農地が広がり、北スマトラ州の州都メダンに売りに出るほどの、ミカンの産地であったという。

4)家庭経済の状況について、月の収入が2,000,000ルピア（2013年当時のレートで18,000円程度）以下の家庭がほとんどで、月の収入額がほぼ月の支出額となっているか、もしくは支出額の方が収入より多くて赤字という世帯も少なくない。特筆すべきは、聞き取りをした世帯の約9割において、何らかの借金があったことである。雑貨屋でのツケなど小さいものから、バイクのローン支払い（ローン月額500,000ルピア程度）など大きなものまで、何らかの借金をしないと家庭経済が立ち行かない状況であり、しばしばその返済も滞っている場合もある。

聞き取りをした世帯は、その7割超が20代～30代で、経済的に脆弱だが、幼い子どもや若い家族のための出費がどうしても嵩む。オムツやミルクなど子どもの必需品はもちろん最優先だが、毎週の支出だけで350,000～600,000ルピアが出ていく。決して無駄遣いをしている様子はないが、収入と支出が不均衡で、さらには借金の返済が続き、貯蓄をすることは困難である。



聞き取りに応じてくれた国道沿いのとあるお宅  
(タンジュン・パウ村、2013年)

5)持ち家について、親（義親）と同居・間借りと答えた世帯が4割近く、親族宅もしくは知人宅を間借りと答えた世帯が2割近くであった。他方、自身で家を建てた世帯約4割の中でも、その約40%が所有者不明の空き地に暮らしており（残りはほぼ親から譲渡された土地）、穏やかな暮らしを送ることは難しい。なお、所有者不明の空き地とは、移転村内での区画整備を行った際にできた区画と区画のわずかな隙間である。合法ではないが、現状として村行政からは黙認されている（つまりは、移転後に増える世帯数に対して宅地などの用地整備が追いついていないのだろう）。

6)土地所有の有無について、自身の土地を所有していない世帯が8割、土地を所有している世帯は2割近くであった。また所有の内訳は、そのほとんどが親からの譲渡、もしくは親からの援助による購入であった。

7)行政からの援助（貧困米、生活が苦しい世帯へ「定期的に」供給される白米、集落で世帯の登録が必要とのこと）について。常に受けている世帯はまれで、不定期に（一度以上）給付を受けたことがあると回答した世帯が約6割、給付を受けたことがないと回答したのが約4割であった。また、医療費扶助（社会保険）は、未登録（1年毎の更新で、期限切れも含む）世帯が7割近くで、仮に登録できていたとしても、世帯毎ではなく個人登録であるため、世帯全員が扶助を受けることができるとは限らない。行政の支援（の受け方）に見られる偏りは、支援を必要とする人すべてが享受できるよう要改善。また、季節、及び居住するエリアによって、飲料水を購入する必要がある世帯がある点については、村内でのさらなる調査と必要な支援が求められる。

8)最も大変だと感じる事及び今後への希望について。移転して補償を受けた親世帯と同様、住居、作物を植える畑、生計を立てるための農地を強く希望している。また、弱者である自分たちの将来を考えてくれる指導者を望んでいる、子どもに十分な教育を受けさせたいこと等も挙げられた。彼らの生活はご覧のとおり、社会保障となるものが無く、政府のサポートなども享受できておらず、将来への蓄えもほぼ無く、借金を返すだけの日々である。

2016年3月に聞き取りを行ったムアラ・タクス村は、1994年1月に新村へ移転した。当時の世帯数は244世帯。移転した世帯とその子孫は新村の第1集落（便宜上1丁目とする、以下同）、第2集落、（2丁目）、第3集落（3丁目）に暮らす。2016年1月時点での村役場の資料によれば、人口は1～3丁目で343世帯、1429名。ここ数年、外部から入ってきたプランテーション企業とその労働者（及び家族）の集落（約270世帯、約800名）が近くにあり、行政的に同村の第4集落（4丁目）とされているが、ここは農業労働者の転出入がよくあるという。

ムアラ・タクス村へのアクセスはリアウ州の州都プカンバルから130km、プカンバルとブキティンギを繋ぐ国道のバトゥ・ブルスラット村交差点から州道へ入り、10～15km程度だと思われる（所々舗装が剥がれ悪路のため体感ではかなりの距離）。北でダム湖、南で他県、東で西コト・トゥオ村、西でグヌン・ブンス村と接する。村には公立小学校、私立のイスラーム高校がある。

同村で話を聞くことができた第2世代の世帯数は73世帯（有効世帯数69世帯）。以下集計結果と若干の考察である。

1)家族構成について。インフォーマントは、20代、30代、40代のみで、うち30代が半数以上。結婚したばかりの世帯も数軒あったが、ほとんどが結婚して数年経過。村出身者同士の婚姻が20組、そして半数以上がミナンカバウ同士の婚姻。他方、ミナンカバウと別のエスニックグループ（リアウ・マレー）の婚姻も若干あり。子どもの数は、0～2人の世帯が3分の2を占める。昔の村での生活では、兄弟が3人以上の世帯が多かったらしい。

2)学歴について。村出身で、大卒は一人のみ、残りは、小卒（一部小学校中退）、中卒、高卒とだいたい均等に分かれる。学歴については、さらなる調査が必要だが、生活環境が大きく変化した移転前後に就学していた年代であり、経済的な要因で進学できなかった可能性がある。

3)職業について、兄弟の多さ故、昔の村ではそんなに裕福に思えなかった、と子供心に感じていた人は多かったが、現在の生活は昔に比べより豊かである、と感じている人はいなかった。親の当時の職業は、ほとんどが農家と漁師で、一部公務員。現在の生計は、ゴム農園またはアブラヤシ農園の農業労働者（農地を持たない）と漁師がほとんどを占め、教職、小規模サービス業（雑貨屋や食事処など）と続く。教職は非常勤で、10年以上勤務しても地方公務員に昇格できず困っているケースあり。



赤ちゃんをあやしながらお話をすることも（ムアラ・タクス村、2016年）

4)家庭経済について、教職の収入の多さとしては、漁業での月收入とほぼ変わらない（幼稚園の教員はそれよりも低い）。また聞き取り時点では、下落が続いたゴムやアブラヤシの市場価格は回復せず、農業労働のみで生計を立てようとしている世帯については、月收入が1,000,000ルピアを切っている世帯も少なくなかった。夫婦共働き、もしくは、農業労働と漁師などの兼業をしても、月の収入は2,000,000ルピア（2016年当時のレートで16,000円程度）前後の世帯が全体の9割超であった。

これで家庭経済が回るだろうか。日々ギリギリの中やりくりするか（やりくりと言ってもあちこちへのツケ）、親に依存するか。加えて、農業労働がまだ収入源として魅力だった数年前（まだゴムやアブラヤシの卸価格が現在の倍ほどであった頃）につくった借金やローンの返済が、より家計を圧迫している。何らかの借金があると答えた家庭は8割を超えた。2,000,000ルピアにも満たない収入で、バイクのローンだけで月500,000ルピアだったり、銀行からの融資返済額が1,000,000ルピア近くだったり、家計としてもはや破綻している世帯もある。一部、タンス貯金を行う世帯やアリサン（有志の互助会）に加入している世帯もあったが、赤字が続き貯蓄どころかスムーズな借金返済も厳しい。



聞き取りに応じてくれた若い夫婦（ムアラ・タクス村、2016年）

5)持ち家について、6割以上が、親（もしくは義親）と同居、2割は借家、持ち家に暮らす残り2割近くの世帯も、親の資産を譲渡してもらったか、もしくは村有地で空いている区画に（そのほとんどが親の援助で）家を建てたかという状況。1世帯のみ、政府（社会省）の住宅支援により持ち家を手にした世帯あり。自分たちで建てた持ち家である、と胸を張って言う世帯はなかった。同居や借家暮らしの世帯は、将来を考え、自分たちの家が欲しいと答える方がほとんどであった。

6)土地所有の有無について。農地（土地）を所有している世帯は、2割に満たない。うち、親からの譲渡がほとんど。土地を所有していても、そこで農業を本格的に始めるための資本がなかったり、整備したがまだ収入を得るほどではなかったりと、土地があってもそこから収入があるとは限らなかった。しかし、財産として、また将来のため、土地を所有する、しないは大きな問題であり、生活していくための（収入源となる）土地が欲しい、との声多数。

7)生活環境、特に水について、同村ではさらなる改善の余地があると考えられる。というのも、用意された井戸の中には、深さが足りないのか水が出ないところがある、水辺まで歩いて行っている、飲料水を購入しているというように、問題は山積している。8割以上の世帯が、水については改善を希望するとの回答であった。

行政からの援助（貧困米）については、定期的に受け取っている世帯が半数に留まった。4割が、一度も受け取ったことがなく、残り1割が、受け取ったことがある、との回答。医療費扶助についても、家族全員の手続きが完了している世帯は1割で、4割が全く扶助を受けられない状態であっ



た。こういった行政からの支援は、偏りがこの間指摘されてきたものの、改善はなされなかった。

ムアラ・タクス村は、文化的にも歴史的にも価値が高いヒンズー・仏教遺跡の寺院を有しており（リアウ州カンパル県でも観光名所として大々的に宣伝されている）、また、川に近いことから、漁師が生計の一つとして考えられる。そのため、ゴムやアブラヤシといった単一の商品作物に頼る農業よりも、観光業や漁業をベースにした加工業などで、村としてさらに発展する可能性は残っている。しかし残念ながら、課題が多く、若い世代が希望すら持てない状況に陥っているのが現状である。

## おわりに

移転をさせられたことで、直接的に不利益を被ったのが親世代であるなら、第2世代は、間接的に被害を受け続けていると言って良い。生活環境が劇的に変化し、与えられた絶対的な貧困からあれこれ努力の末生き延びてきたのが親世代であるなら（何としてでも生き残るための手段を「勝ち組」などとズレた評価<sup>1</sup>をするのはいかがなものか）、旧村のままならば存在しただろう、若者や子孫を守るためのセーフティネットがなくなり、自分たちの村であるにもかかわらず、間借りしたような不安定で苦しい生活を強いられているのが第2世代である。貧困は、より見えづらくなり、脆弱な次の世代に絶望と共に継がれている。社会の絆は希薄になってしまったのだろうか、これが全て自己責任、負け組、といった言葉だけで片付けられてしまうのは、あまりにも酷ではないか。

もちろん、筆者がここで述べたことが現地の全てではない。しかしながら、現状を語る貴重な声であることは間違いない。筆者が声を聞いた彼らは、これから生きて、村を、共同体を繋いでいく人たちである。25年余が経過した現在、コトパンジャン・ダム建設によって移転させられた人びとのこれらの暮らしぶりを見てもなお、我々はこれを「優良案件」<sup>2</sup>として終わらせてしまえるのだろうか。筆者は、これからも、彼ら、そしてその次の世代を見つめ、声を聞いていきたい。

---

<sup>1</sup> 佐藤仁『開発協力のつくられ方 自立と依存の生態史』（東京大学出版会、2021年、247-248頁）参照

<sup>2</sup> 同書、243頁参照